

(課程博士・様式9)

愛知教育大学・静岡大学大学院教育学研究科

学位論文審査報告書

審査委員

審査委員長 筒井 清次郎
委員 新保 淳
委員 古田 真司
委員 石川 恭
委員 子子 潤
委員 _____
委員 _____

審査期間 平成 28年 11月 25日 から 平成 29年 1月 21日

審査論文

小学生のレジリエンスを高めることを目的とした保健教育プログラムの開発

専攻 共同教科開発学専攻

氏名 原 郁水

生年月日 昭和 58年 10月 19日

提出日 平成 28年 11月 16日

審 査 概 評

(1,000 字程度)

近年、教育現場で問題となっているいじめや不登校など、児童・生徒の様々な心の健康課題に対して有効な教育（指導）プログラムが求められている。これに対して我が国では、教科外活動や道徳あるいは体育科保健領域などで、様々な「心の健康」に関する教育活動が行われてきたが、残念ながら理論的背景に基づいた教育プログラムはほとんど報告されていない。本論文では、児童・生徒が困難に直面した際に適応する能力（心理状態）、あるいは、困難状況における落ち込みから回復できる能力（心理状態）である「レジリエンス」の概念や理論を用いて、地道に「理論」と「実践」との往還を繰り返して、この喫緊の課題に取り組んだ。困難な状況が多い中学生になる前の予防的処置として小学生を対象に、レジリエンス尺度の開発、短時間の児童への介入プログラムの検証を経て、我が国で初めてとなる、小学校体育科保健領域で活用可能なレジリエンスの育成プログラムを開発した。

本論文は第1章～第6章で構成されている。第1章では、これまで国内外で報告されているレジリエンス及び近い概念に関する先行研究を、歴史や定義、測定方法、育成のための介入などの観点から整理し、レジリエンスの尺度と育成のための介入方法について、新たな視点での分類を提案している。第2章では、レジリエンスとストレス、セルフエスティームの関係を明らかにすると共に、「肯定的な未来志向」「興味関心の追求」「感情調整」の3因子からなる小学生用レジリエンス尺度の開発を行い、今後のレジリエンス教育の効果検証を可能としている。第3章および第4章では、調査や部分的な介入研究を繰り返し、最終的な教育プログラムの骨格を決める基礎作りを行っている。第5章では、これまでの知見に基づいた介入を組み合わせたプログラムを用いて、統制群と比較した効果検証を行い、本研究における最も重要なエビデンスを導き出している。第6章では、本研究で得られた結果をまとめ、今後の課題についても言及している。

本研究の特筆すべき点は、現場経験や単純な理論だけで作られることが多い保健教育の内容を、緻密な理論分析と繰り返し行った詳細な実践に基づき、一連の教育プログラムとして成立させ、また、その効果について厳密な科学的検証を行った点である。学校現場で実施された介入研究としてはきわめて先駆的であり、保健教育分野の新たな研究として高く評価できる。理論と実践を組み合わせた本論文の構成は、教育心理学や教育環境論、保健教育の方法論と内容学など組み込んだものであり、教科開発学の論文に値するものである。

以上により、本論文は博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると認める。